

▲家政
雷豆腐、松茸豆腐
油揚げに割葱などで
ある。

●潮汁の製
へ方

潮汁は、食鹽を鍋へ
入れて炒つて、それ
へ水を注入して、汁
の實の魚類を入れて
煮るのが正式である
水に燒鹽を和れるの

妊娠中の心得

飲むが可い。其の様にしても効が無いときには、醫
者に診察を請ふて薬を服むが可い。

●哺乳の準備

乳汁は出産後に哺乳するものであるけれども、出産前
に乳汁が出るやうに準備をして置かなければなら
ないそれは外では無い、妊娠して六月目頃からは、
成るべく乳の邊りを緊く締めないやうにして、胸部
を阻りとして置いて、乳房が十分に育つやうにする
のである。さうして毎日微温湯で乳の邊りから腋の
下の邊りを拭くのである。斯うして八月日の末頃か

は略式である。これ
を鹽仕立さいふ。こ
れには鯛を用ゐる。
汁の實の魚は、別に
鹽湯でざつと湯がき
箸に入れて水分を切
り、汁椀に盛る前に
汁の中へ入れ、一煮
して盛るのである。

●味噌汁の
製へ方

味噌汁には、白味噌

▲家政

妊娠中の心得

らは、朝と夕と二回、水か又は微温湯で胸部の邊り
を拭いて、毎日指で度々乳首を撮み上げて、引き延
ばすやうにするが可い。是れは乳首を大きくして、
生れ兒に乳汁を哺乳易くして置く爲めである。斯う
すれば大抵は乳首が大きくなる。又、乳首を柔らか
過ぎないやうにして置くことである。これは度々酢
か焼酎か、又はブランデーを着けて擦るのである。
斯うすれば乳首の皮膚が漸次に強くなるものである

●夫婦同衾せぬ事

妊娠した初めから、夫婦同衾してはいけない。若し

妊娠中の心得

▲家政

汁赤味噌汁、洗ひ味噌汁である。赤味噌汁は、赤味噌六分に白味噌四分を和るの
で、白味噌汁は白味噌勝にして赤味噌を和るのさ、又は白味噌ばかりにするのである。洗味噌汁と云ふのは、何味噌でも播らないまゝで、鯉節出しの中へ入れて

妊娠中の心得

交合すると、妊婦たる自己に障るばかりで無く、胎内の児にナキに害を興へるから、これは慎まなければならぬ。

● 出産の時用ゐる物の用意

帯かけをしてから後は、出産の時に用ゐる物を用意して置くことである。是等の事は、姑、又は実母、或は嫂、姉などに問ひ、又は指圖を受けて調へることである。其の大概を挙げれば、左に記す様なものであらう。

油紙、襦袢、小蒲團、汚れ物を入れる布袋、胞衣

▲家政

かきまは、それを羅摺拌して、それを羅斗で裏濾にして煮るのである。
味噌汁の類は、鯛、小鮎に刻菜、蛎に刻蘿蔔、芋蛸、蒲鉾に打き菜、鱧、蛤、蜆、赤貝、すりみ、もろこ、泥鰌、赤えい、貝の柱、鯨、小鰈、江鰈、小鯨、小鮎、鯰、烏賊と和布

妊娠中の心得

桶、胞衣切、綿、苧、半紙、生児の衣服、襦袢、木綿製の温あげ布、手拭、枕、紐を付けて結ぶやうにした児の臍を覆ふ布、巻蒲團など、
右は古來用ゐ來つたものである。今の産科醫が言ふものとは少し異ふけれども、實際用ゐるときには、これと考へ合せて能く計らふが可からう。今の産科醫が用ゐてよいと言ふ用具は、左の品々である。
生児を洗ふ盥、陶器の便器か、或は鐵葉製のもの
白紙、白の晒木綿の糊を洗ひおとしたもの一反分
それを二尺か三尺の長さに切つたもの、三尺四方

▲家政

蘿蔔、干蘿蔔、干蕪菁、若菜、頭芋、芋黃、干芋、揚蒟蒻、手勞さゝかきの狸汁、蔞、菠薐菜、茄子、刻松茸、南瓜、冬瓜、隱元豆、越瓜、刻菊、氷豆腐、雪花菜、薯、諸、粕入、雲雀汁、薩摩汁、さろ、い、さ、こ、汁、などである

●煮物の仕方

妊娠中の心得

ほごの油紙でも謨護布でも、何方でも二枚、能く洗濯した襦袢二枚、括り枕、脱脂綿、脱脂ガーゼ糊氣の無い晒木綿が、又はフランネルの生兒の衣服二着以上、襠褌、これは新しい白木綿で製すれば此の上ないが、都合で古い布を用ゐるならば、布に熱湯を度々注いで、能く洗つて日光に乾かして、それで製るが可い。決して不潔の布を用ゐてはいけない。

●出産の時の看護人の用意

右の入用品を用意したれば、豫て懇意で、出産を助

▲家政

食物を煮るのは、強くない火で徐々煮るのが可い。ただれども、魚の肉だけはさうしてはいけない。魚の肉に弱い火で徐々煮ると腐敗する恐れがある。それ故に初めから強い火を用ゐるが可い。肉の他は急に煮ないが可い。急に煮ると味が悪し

妊娠中の心得

ける心得のある、産婦と氣の合ふ年長の婦人をば、看護人に頼んで置くことである。是れは出産のとき産室の中を整へ、湯を沸し、其の他いろいろの事をさせる爲めである。此の看護婦は出産の期になつて招き寄せては、間に足らないこゝがある。産室は其の看護婦の住む家で無いから、出産の用具や其の他の置き所などが、知れないこともあらう。依て、前以て何處に在ると云ふことを心得させて置くために前方から宅へ招き寄せて置くが可いのである。それで、晩くとも臨月の前の月には呼寄せて、傍に置い

▲家政

て消化も宜しくない野菜類や、蘿蔔等などの根菜や製造した食品などは殊に強くない火で徐々煮るのが良い。さて又蛋白質物を含んだ物は肉に味を有たせる爲めに煮るのこ、煮汁を旨くしようとして煮るのこ煮方が異ふ蛋白質物を含んで居

出 産

て慣れさすのがよい。併し姑でも、嫂でも、其の掛りをして呉れば、看護婦は臨月の初に招きよせてよい。前にも言ふ通り産婦と氣の合ふもので無ければ産室へ入れてはいけないのである。

○ 出 産

出産となるこ、先づ産室を擇まなければならぬ、産室は、大家では、主婦の平常の居室か、其れより上を望めば、前裁が見える二室つゝきの坐敷で、往來の車の響きや、すべて噪がしい音が聞えない室が

▲家政

る物を弱い火で徐々煮るこ、幾分かの蛋白質物が脱け出す煮汁を旨くするのは此の煮方で良いけれども、肉に十分蛋白質物を有たして旨くするのは、煮立つた汁の中へ肉を入れて蛋白質物が液の中へ脱けないやうに煮るが可い。斯うして煮

出 産

良い。以前の習慣では、薄暗い狭い部屋などを用ゐたが、あれは甚だ宜しくない。前裁が見える座敷は明るう過るけれども、硝子障子越に時々は前裁の樹花のある時分なれば花、雪なども見られる事にしてそれを見ないときは屏風で圍つて置けばよい。さうして産室は殊に空氣の交換と適宜の温度を有つとが肝要である。其の温度は、攝氏の二十度か、華氏の六十八度ぐらゐの温度を適度として、空氣は時々建具を開閉して入換へ、寒い時でも多くの火鉢を置いてはいけない。此の温度を有つのは、産婦の爲

▲家政

て味を付けるにも、魚類の他に鯉節は一番に入れて、次に砂糖や味淋酒などを加へて、食塩や醤油や味噌などは一番終ひに入れるのである。此の順序を誤へては味が悪いばかりで無くて、不消化物の繊維が堅くなつて、大きに衛生に害がある

出 産

めばかりでは無い。生児の冷えない爲めでもある。さて産室は二室つゝいきが可い。何故かと云ふと、時々産婦の臥褥を更へ、又、室の掃除をするとき、或は空氣を入換へるとき、産婦を彼方此方遷し換へるに都合がよいからである。

●出 産 期

帯かけをしてから臨月に至るまでの間には、胎の兒が動くことが度々ある。初めには腹の上の部を覺えるが、漸々下へ下つて動くに覺へるのは出産期に近づいたのである。又、時々腹が痛むことがある。そ

▲家政

併、佃煮の様なもの始めから食塩でも醬油でも入れるのである。魚の煮付なれば酒と醬油を合せて鍋へ入れて、煮立させておつて、それへ魚を入れて煮上るので、これには魚の姿が壊けない爲めに、鍋の底へ煮米か又は竹の皮を豎に切目を

出 産

れは數時間隔て、痛んだり、或は何日も隔て、痛むのは未だ出産期に至つたのでは無い。痛む時間が長くて、痛みが治まる時間も短くて、漸々治まる時間が短くなつて来て、頻りに痛むのは出産期に至つたのである。斯うなると其れから三四時間経つて兒が生れる。依て産婦も看護婦も其の心得があつて、看護婦でも誰でも、産婆の宅へ使を馳らせて招いて、直ぐと産室を整へて、湯を沸しなごするのである。出産は人によつて同じくない。兒が生れるに迫つて居るのに、腹の痛みが治まると暫く眠り、程たつ

▲家政

入れたのを敷いて置いて、煮上つたれば箆でも竹の皮でも両端を持つて引揚げるのである。

煮物の類は、塩魚と昆布、蘿蔔と生又は塩魚の鯖、鯖、さごしなごのせんげ煮鶏卵さち、天ぶらと葱との南蠻煮、天ぶらと苟、氷豆腐と茶

出産

て又痛むと、目を覺まして出産するものもある、又、生れる期になつて居るのに出産が暇ごることもある斯う暇取るときには、産婦の腰部を温めるが可い。さて、難産と云ふことは無いけれども、これは生育の道理を知らずに、濫りに力を入れて力むからである。産をするに至つて兒返りするたびに、一しきり腹が痛むものである。臍の邊りで痛むのは、胎の兒が終に身体を動かすばかりで、まだ眞實の出産期では無い。此の際に力を入れて努むことが早過ぎるので、横産と言つて、胎の兒が手を出したり、或は逆

▲家政

と推葦、焼鰓と越瓜魚肉と豆腐、蒲鉾と紫蕨と子芋、葱姑のケンチン、魚さ爪、葛粉煮のつべい、鯨と大根、肉鯨と水菜、葱豆腐、飛龍頭と菜、味噌煮、棒鱈と大根、又牛羹と、苟と刻昆布、王節魚と蒿苳、松茸と蒲鉾魚類の煮付、蛸の柔

出産

産になつて足を出すやうな憂がある。此の様な間違つたことを爲無くて、腹部から腰部へ痛んで來てから力を用ゐるがよいのである。すると産婆も聲を發して努む。これは古來實行した出産法であるが、今の改良の産婆の仕方は異ふ。出産期に至つて、下腹が劇しく痛んだならば、産婦は身体を動かさずに、産室の支度をさせて、産室へ這入つて、兒が生れるのを待つのである。其の時の衣服は、平常の寢衣を着て居るが可い。併し紐を緊く爲ずに緩くして、髪は結つてあつても解いてざ

▲家政

か煮、蛸の櫻煮、じぶく煮、關東煮、時雨煮、すっぽん煮、鰈のおろし煮、鯉の甘露煮、きんこの深山煮、旨煮などである。

●焼調理の

仕方

魚類を焼くのは、小魚なれば金網を用ゐる。其他は成るべく金

出産

つと結んで置くが可いのである。尤もこれは看獲婦にさせることで、自己がしてはいけないのである。さうして喉が渴けば冷たい水を飲み、決して催め薬などを服まないが可い。此のときには、大小便の通じ方が良くななくてはならない。大便が秘結して居れば灌腸をさせ、腹が空いてあれば粥に消化れ易い鶏卵の半熟か、牛乳か、又は肉汁などを食べ、看獲婦は産室の中へ床を展べ、床の上に油紙を敷くか護謨布を敷くかして、尙又其の上に、能く洗つた被單を覆ひ、産婦を臥させ、産婦は身体を静にして臥し、

▲家政

串か竹串を用ゐるのである。火は能く熾して遠火で焼くが可い。弱火では焼下りかして宜しくない。又。近火は火が中肉に通らないうちに魚が焦る。依て強い火で遠火で焼くのである。金網で焼く魚は先づ金網を火に翳して熱くして置いて。

出産

それから看護婦は湯を多量沸し、鹽の用意をするのである。これには手拭幾筋かど、石鹼、金盥、大きな鉢二つ、其他出産用の物一切を取揃へて持ち込み、斯うして置いて室内にある不用の物を皆々室の外へ持ち出すのである。出産はたい兒の身体ばかりを生み出すのでは無くて、兒の身体と兒の身体を包んで居た卵膜と云ふ薄皮と、其の皮の中にあつた湯と、胎盤とを出すのである。これが一時に出るものではない。胎盤は臍帯付で後から出る。それを出して終ふまでは、陣痛と

▲家政

それから魚を上せるのである。魚が焼けて網から取のけるさきも。網が少し冷たし分に徐かに魚を取るのである。さうすれば肉が壊れない。焼く物の類は。魚の味噌焼魚田と云ふもの。茄子の鳴焼。野菜類の田楽。焼松。鰾。茸の鬼がら焼。

出産

言つて腹が痛むもので、其の陣痛にならなくても、出産の二日か三日位からは、時々少しの痛みが針さすやうに下腹から腰部で痛むものである。陣痛になつてから生むまでの痛みは、休み／＼で六時間から十二時間までほど続く。決して痛み続くものでは無い。後産で胎盤が出るのは、兒が出てから三十分間ほど経つて出るのである。それが通例であるけれども、三十分間ぐらゐで出なくて、それより後れることもある。左様なときに後れたと思つて厭出すやうなことをしては宜しくない。自然に任せて時の至る

▲家政

鶏卵焼。照焼。鋤焼。壺焼。漁焼。炮蛤焼。土藏焼。カステラ焼。蒲焼。紅毛焼。附焼。目焼。蠟焼。照焼。傳法焼。鐵砲焼。合せ焼。擬製焼。木芽焼。巻焼。杉板焼。鹽焼。味噌焼。などである。

●注け醬油

これは。山葵醬油。

出産

を待つて、それでも出なければ産科醫か、又は産婆の手當を受けるが可い。兒の生み方は、古來の風では臺に凭かゝるか、又土地と依つては米俵で産婦を挟んで、其の間で生むのがある。それで今でも舊風の産婆は坐らせて物に凭らせて生みますが、改良産婆は、初めは仰向に臥させて、破水が下りてから後は、側に臥させる。生兒に産湯を浴せるのは産婆の受持だから産婆に任せるのだが、これは餘程大切なことであるから、信用のある良い産婆を頼まなければならぬ。又、

▲家政

胡麻醬油。山椒醬油
木茅醬油。芥子醬油
などである。

●注け酒

これは。いり酒。煉
酒。甘酒。生姜酒な
ごである。

●注け酢

これは。生酢。煮返
酢。合せ酢。二盃
酢。三盃酢。七盃酢

出 産

信じた産婆でも、産科醫に頼むことを産婆にさせて
は危険である。それ故に初産の者は早くから産科醫
を頼んで置くが可い。

○産 後

産後には大抵少し寒氣がするし、又、熱氣もある。
さうして疲れて暫時は能く寝入るもので、生れた兒
も亦共に寝入るものである。此の時看護婦は、産婦
に目を覺ますまで寝かして置いて、さうして屏風で
圍つて置くことである。産婦は十分に眠て眼が覺め

▲家政

燒酢。黒酢。青酢。
白酢。蓼酢。柚酢。
蜜柑酢。砂糖酢など
である。

●混ぜ味噌

これは。木芽味噌。
生姜味噌。胡麻味噌
葱味噌。胡桃味噌。
芹味噌。焼味噌。酢
味噌などである。

●刺肉の作

産 後

ると、氣分がさつぱりとして心が慥になつて喉が渴
くものである。産婦が眼を覺して、何か飲みたいと
言へば、看護婦は清らかな水か微温湯か、麥湯か砂
糖湯か、又は淡い茶か、此のうちの何でも好く物を
飲ますが可い。食物は三日目頃までは餘り欲くない
ものであるが、食べるならば白粥に燒鹽か又は梅干
でも少し添へて、少しづつ、何回にも食るがよい。三
日目になると食たいと思ふ。食るには白粥に鶏卵の
半熟か、鯉節の煮出した醬油加減したものか、鳥類
の肉汁を添へて食て可し。又、牛乳を飲んでもよい

▲家政

り方

刺肉は生で作る物と
さつと湯煮して用ゐ
るものさあつて、其
の添汁や取合せ物も
魚に依つて異ふ。又
作り方は、平作り、
笹作り、原作り、洗
ひ作り、細作り、水
作りなどの種々ある
刺肉に用ゐる魚と
注け醤油と取合せ物

産 後

此の頃に古血を下す効があると言つて、乾芋莖を煮
しめて食べる地があるが、これは大間違ひで宜しくな
い、総て乾莖、だの干瓢などの乾物類は不消化物だ
から、食ては良くないのである。それで、白い肉の
魚の刺肉に、赤味噌の豆腐汁、又、餛飩の能く煮た
のなどを少しづつ、食べるが可い。何分にも食過ぎては
害がある。香の物や菓物は、決して食てはならない
衰弱が甚ければ生鶏卵を毎日二つ三つも吸つてよい
健康な産婦なれば二十一日目を過ぎたれば、常の食
物を食ても可い。併し餘程加減して、成るべく減へ

▲家政

そば、左の通りであ
る。鯛、比目魚は平
作りで山葵醤油。
鮪は平作りで蘿蔔お
ろしを添へ生醤油。
鱸は洗ひにして貝の
柱町風を添へて山葵
醤油。
針魚は笹作りで、蒿
萱が嫁菜を添へて、
合せ酢か又はいり酒
かまがつを
鮎は細作りにも

産 後

て食るが可い。此の時分には柔かい牛肉か、又は淡
い魚などを食始めても可い。舊風では産後に小忌と
言つて三十日の間産褥に居るのである。これは大き
に宜しい。何分にも三七夜と言つて二十一日の間は
動かないがよいのである。舊風では此の小忌の間は
夜具などを凭れ物にして、それに凭れて居ることだ
が、改良では臥て居る方が可いとする。出産から四
日位までは、是非仰向に臥るのを良いとして、成
るべくは一週間目まで仰向に臥て居るのを最も良い
とする。八日目からは側に臥るとも、起直つて居る

▲家政

平作りにして、芽紫蘇、芽蓼、獨治、岩茸、香蕈、鶯菜、蓮芋、蓮根、茗荷の子の肉を用ゐ、添汁は、山葵醬油、おろし醬油、生姜酢、芥子酢味噌の内を用ゐる。鱧は骨切にして切つて沸り湯を注ぎ、木茸、岩茸、芹、三葉を取合せ、雞波酢か

●産後

とも、勝手にしてよいのである。

●産後の便通

産後三日にまで大便の通じが無ければ、早く産科醫に告げて便通を付けて貰ふが可い。さうして便が通じらぬやうになつても、便所へ歩いて行つてはいけない。挿込の便器を挿入れて貰つて、それへ用便をするのである。殊に出産をした日には、決して便所へ行つてはいけない。左様な不養生をして、若し子宮が落ちるか、形ちを變ることがあつては、後日に大きな病を遺す憂があるからである。小水は産後六

▲家政

酢味噌が山葵醬油を用ゐる。霜味噌降鱧はをろし山葵酢味噌で。鱧は切つて湯煮して白髪蘿蔔を取合せて芥子味噌。鳥賊は薄作りで獨活紫蘇、岩茸、木茸など取合せ、生姜酢でもいり酒でも、酢味噌でも。

●産後

時間から八時間までのうちに必ず一回は通じなくてはならない。若し其の通じが無ければ、これも産科醫に告げて、通じを付けて貰はなければならぬ。●産後下り物の心得 産後の後には下り物がする。これは兒に乳汁を嘔ますと三四週間で終るものであるけれども、乳汁を嘔まさなければ六週間から八週間までも終らないものである。併し日が経てば下り盡るものだから、下り盡らないと思つて心配するよりも、衣服や食物に注意して、日だつのを待つが肝要である。急噪つては

▲家政

鯉は薄作りで、薄茶防風さ取合せ、いり酒でも芥子酢味噌で

●酢の物の作り方

酢の物も刺肉の様に作つて、酢で食るのである。

酢の物の類は、しま鱈の細作り、鯛の皮作り、鱧の細作り

産後

いけない。

●産褥の寝汗注意の事

産後に一寝入した時を始めとして、何時でも睡るうちは汗をかくものである。それを産褥の寝汗と謂ふ。此の頃には産婦の身体は、風ひき易くなつて居るものだから、只々風を引かないやうに注意すべきことである。此の風邪が原因になつて、重い病氣になつて死ぬ者があるから、實に恐るべきことである。●會陰裂傷の養生 餘り無い事ではあるけれども、初産だと出産のとき

▲家政

巻肉、細作り、銀皮作り、鮑は揉鮑、鱈は紙塩、比目魚は細作り、鱈は細作り鯛は薄作り、蛸は隠し酢か溜め酢、此の他は鮫、鳥賊、鱈、鯨など。

●和物の作り方

これは、前に言つた和味噌で和るのであ

産後

に會陰に裂傷をすることがある。極小さい傷ならば、身体を静にして傷所を清潔にして置けば癒るものである。此の様に裂け易いものだから、少しでも股を廣げなごしてはいけない。睡眠中にでも股を廣げては悪いから、用心の爲めに細帯で外腿から緩く括つて置くが可い。若し又會陰の邊りに痛みがあつて、尿をするときに劇しく痛めば、傷は小さくないと思つて、必ず捨置かずに醫者に診察を請ふて、早く局部を縫はすが可い。これは産後七八時間のうちに縫へば容易く癒るから、縫ひさへすれば心配す

▲家政

る。
和物の類は、鯉、
鱒、鞋底魚、ひら、
うぼせ、映、あなご、
刀魚、鮪、鰯などの
鐵砲和、右の魚類や
貝類、鯨のいりから
鯨などのぬた。鳥賊
鮑などの梅肉和、貝
の剝肉又鯨はの薄切
の芥子味噌和、雁鴨
の山葵酢和、鳥賊や

産 後

るには及ばない。若しもそれを差かしいと思つて、
其の儘で日が経てば種々の病氣を引起すから、手後
れして後悔をしないやうにするがよい。

●産後の乳熱

産後三日目には乳熱と言つて熱が発るものである。
これは等閑にして置いてはいけない。乳熱の徴候は
乳房が大きに脹れて、其の前に寒氣がして少々熱が
發るものである。熱が其の日だけ位で治まれば可
が、發熱が続いて治まらずに一時に昇ることがあつ
たり、又、熱が差し引きすることがある。すると産

▲家政

田螺の芽木味噌和、
芝鰕春菜の胡麻醬油
和、獨活や筍の胡椒
和、鮑や赤貝の膽海
和、鮑や赤貝の腸和
鯨、きんこ、鮑、數
の子、蒟蒻などの白
和、鱧、蛤、蜆、數
の子などの黒和、牡
蛎や蛤の草和、鮑の
鯛の白子和、鮑の海
苔和、鳥賊のかびた

産 後

婦は衰弱して竟には死ぬることがある。此の原因は
何かと云ふと、産室や産具の不潔から發るのである
又一つの原因は、産科醫や産婆が漫りに内診するか
らも發る。依て内診は固く斷つて受けないが可い。
産婦は、京阪地方では六日だ、關東地方では七
夜に腰湯をする習はしで、其の日までは衣服を着か
へることは無いが、當今の産科醫は、氣分が悪くな
ければ二日目あたり室を温かにして置いて、時刻
は晝夜に、寢衣と襦袢と湯巻を密と着かへても可
いと言ふ。併し衣服は軽くて暖かなものを用ゐるが

▲家政

人、和などである。

●浸し物の作り方

これは何でも茹でて炒胡椒の磨つたのを醬油に和ぜた胡椒醬油を注げるか、或は花がつなを撒けるのである。其の物は芹、三つ葉、嫁菜、蒲公英、波稜草、鶯

産後

可い。さうして其ればかりで無く白木綿かフランネルで、腰部を緩く幾重にも巻くが可い。さて又着換るとき室を温めるのに、あまり温かにし過ぎて気分が悪くなつてはいけない。適度にするのである。

●見まひ者に注意すべき事

出産があつたと聞けば見舞に来る人が多い。此の見舞者に、直ぐと産婦に應接させてはいけない。人と話などをすると精神を攪亂して逆上あがり、大きな害を受けるから、出産したことは早速世間に知れないやうにして、見まひ者が来れば産室へ入れずに、

▲家政

菜、織切蘿蔔、筍の甘皮、胡蘿蔔葉、蘿蔔、蒿苣、藜、拘杞の嫩芽、又は葉、十大角豆、胡椒の抜苗、蕪菁菜、水菜などである。

●漬物の漬け方

漬物には澤庵漬、鹽漬、糖漬、酒粕漬、味噌漬、浅漬、切漬

産後

別の室で代人が見舞を受けるが可い。

●生兒の身体を調べさせる事

生れた兒は、出産の翌日あたりは、明るい所で産婆に調べさせて、若し不具な所か疵があれば、良い醫者を頼んで、早速手當をしなければならぬ。さうしなければ、癒える疵も治る不具も、日が経つては手後れになつて治らない。これは大切なことである。

●生兒の産髪の手

生兒の産髪は、大切な頭を護るものだから、決して剃つてはいけない。剃ると風をひくことがあり甚

▲家政

なごある。

●澤庵漬

早く出して食^{たべ}る澤庵漬は、乾大根百本に糠を凡そ六升と鹽三升五合ほどで漬けるのである。又、夏を越して永く食^{たべ}るのは糠四升に鹽を八升程も入れて漬けて、壓^お石を強くするのである。

産後

しきは驚風^{けうふう}を患^{わづら}つて死ぬることがあるからである。

●乳腫物

産前^{さんぜん}に乳汁^{ちゅうじ}を嘔^のます準備^{じたくしらへ}がしてあればよいが、それがして無いと乳腫物^{ちゅうしゅぶつ}を患^{わづら}ふことがある。若し左様なことがあれば、捨置^{すてお}かすに早速^{さつそく}と良い外科醫者^{げいしや}の治療^{ちりょう}を受けなければならぬ。

●生兒に乳汁を嘔ます事

産後^{さんご}に初めて兒^こに乳汁^{ちゅうじ}を嘔^のますのは、兒^こを生^うんで産婦^{さんぶ}も生兒^{せいじ}も一寢入^{ねいり}して眼^めが覺^さめたときに嘔^のますのである。一寢入^{ねいり}の時間^{じかん}は大概^{たいがい}七八時間^{じかん}である。さて此

●淺漬

これは大根でも、蕪菁^{わしやう}でも、茄子^{なす}、胡瓜^{くわ}でも漬ける。これを一夜漬^ひきも云ふ。糠みその中へ漬けて、一日^{いちにち}か一夜^{いちや}で取出すのである。大根蕪菁は切^きつて日光^{にっこう}に當^あてそれを漬^ひけるのである。この他に菜類^{さいるい}も

▲家政

産後

の嘔^のまし初^{はじ}めは、乳汁^{ちゅうじ}が十分^{じぶん}に出^でないもので、少しよりか出^でないけれども、兒^こは未^{いま}だ多量^{たくりやう}に嘔^のむことが出來^でないから、出^でるほど吞^のましてよいのである。此の吞^のましなければ、吞^のますのを急^{いそ}ぐといけない。氣^き長く急^{いそ}に吞^のまし習^{なら}つて、兒^こにも吸^すひ習^{なら}はずのが肝^{かん}要^{よう}である。然^{しか}るに兒^こが泣^なき出すと、乳汁^{ちゅうじ}の吞^の量が足^たりない故^{から}だと思^{おも}つて、他^たの物^{もの}を飲^のますのは大^{おほ}きに宜^{よろ}しくない。何^{なん}となれば、乳汁^{ちゅうじ}は生兒^{せいじ}の胃^い腐^ぶろ^ろなかで能^よく消化^{こな}す作用^{はたらき}はあるが、他^たの物^{もの}は乳汁^{ちゅうじ}よりは消化^{こな}れ難^{にく}くて害^{がい}するからである。それで乳汁^{ちゅうじ}の

▲家政

清ける。

●鹽 漬

これは鹽で漬けるので菜は能く洗つて水分を滴して、鹽漬にして壓石を置き、二十日ほど経つて生ずのである。鹽は適宜に撒つてよい。蕪菁菜を漬るのを莖菜漬と云ふ。又、大坂漬とも云ふ。此の中へ

産 後

他は砂糖水さへが消化れにくいのに、体毒下したと言つて、五香だの、まくりだの、鬼灯の根などを煎じて飲ますが、これは以ての外のことである。生れて間の無い赤子に甚い下痢を發すのは、これが爲めで誠に危険なことであるから、左様なものを飲まさないが可い。乳汁の中には腹毒下しの加減も、蟹糞下しの加減も、配劑がしてあるから、乳汁さへ吞ませば十分と思ふが可い。少しでも適度の乳汁さへ吞めば、兒は体内の滋養も取れ、適度の便通もあるものである、若し乳汁が出かねるか、又は兒に申斐性が

▲家政

大根でも蕪菁でも、雜べて漬ることかある。鹽漬にするものは、甲割菜、間引菜、中拔菜、小かぶら、驚菜、壬生菜、水菜、大根、茄子、越瓜、などである。

●切 漬

これは大根なれば、根も莖も細かに刻んで鹽を撒かけて、手

産 後

無くて、能く吞まなければ、乳汁を一二滴兒の口へ搾り入れて、口中を濡らすだけでも可い。さうして一日や二日は、何も飲まさなくても可い。併し日が経つても斯様であれば、止むを得ず生の牛乳を淡めて少し、吞ませ、吞ましてから二時間おきに母の乳汁を吞まして試み、それでも思ふやうに吞ますことが出来なければ、又々淡めた牛乳を吞まして、兒が母の乳汁を能く吞むやうになるまで斯うするのである。根氣よく斯うして居れば、いつしかに産婦は飲まし上手になり、兒は飲み上手になるものである。

▲家政

で揉んで、桶に漬けて、
て壓石をかけて、水が上れば出すのである。これには蕪菁も雑ぜる。又、京都でする切漬は、蕪菁の根ばかりを四つ切にして、小口から薄く切つて、ちよつと日に乾して、壬生漬を短く刻んだのこ二品を鹽と糠とで漬ける

産後

生兒の爲めになる乳汁を飲ます産婦であるから、
其の資品として滋養物を食なければならぬ。依て
滋養のある柔かい肉、牛の乳、鶏卵の半熟、鳥の肉
汁などを少しづつ、必ず食ふが可い。
兒に乳汁を飲ますときに、乳房を兒の口に被さる
やうにすれば、兒の鼻息を塞いで、腫殺す恐れがある
依て能く注意して、寝入りながら乳汁を飲ましては
ならない。
乳汁は出ても、子細あつて乳汁を飲ませば兒の毒
になれば、其の乳汁は飲ませずに、乳母に付けるか

のである。

●味噌漬

これは大根、茄子、
刀豆、牛蒡、松茸、
昆布、胡蘿蔔、など
を赤味噌に漬ける。
大根は澤庵漬を水で
洗つて陰乾にして漬
けるので、茄子も鹽
漬にした物で、刀豆
は糠漬にしたもの、
牛蒡は其の儘で細

▲家政

産後

又は牛乳を飲ますがいよいよ。

●産婦が止むを得ず乳汁を止る

ときの心得

産婦に乳汁が出て、身体が健かたで無い爲めか、或
は乳首を痛めた爲めか、又は醫者に止められて飲ま
せられない時か、兒が死んで乳汁が不用になつたと
きには、乳汁を止げなければならぬ。左様なとき
に乳汁を止げるのは、毎日幾回も温湯で乳房の邊り
を洗つて、乳房を揉んで柔らげて、吸乳器で吸ひ出
すか、又は手で搾り出して、木綿の布で包んで置く

▲家政

い所、松茸つほみは苔こけの小さいのを、根ねの所を庖刀で削り、策さくに入れて熱湯を注かけ、乾して一日半漬ける。昆布こんぶは荒昆布を一夜水に浸つけて能く洗つて、兩縁へりを取つて日に乾がして、好よい様に切重ねて漬け、胡蘿蔔は本末を切り、五六日程風すき的好

産 後

がよい、さうしてから醫者いしやに請こふて能く手當てあてをすることである。

●産後眼の養生

産後さんごには細こまかいものを見るのは悪わるい。針仕事はりしごとなどするののは少すくしでもいけないし、又また、書籍しよせきや新聞雜誌しんぶんざっしなどの小ちひさい文字もじを讀よむのは甚はなはだしい不養生ふようせうである。これを慎つしまなければ眼めを害がいする。

●産後の床ばなれ

産後さんごの床とこばなれは、舊來きうらい小忌こいみと言いつて、産後さんご三十日にち間は離はなれなかつたが、氣分きぶんさへよければ、十日も經た

▲家政

い所に置き、鹽漬しんじにして一月ほど經たつて取出し、一日ほど日に乾して漬けるのである。

●奈良漬

これは越瓜こせう、茄子なすなごを漬ける。越瓜こせうは大きなのを二つに割り、中ちゆうごみ取とつて鹽しんに漬け、取出して水みづで洗あひ、それを踏ふ込

産 後

てば日中ひちゆう一二時間じかんぐらゐは床とこを出でて、氣きに叶かなつた用事ようじをするのもよい。氣分きぶんが悪わるければ出でないが可よい。

●産後の外出

産後さんごには、餘よほど日が經たつまでは外そとへ出でないが可よい。舊來きうらいは七十五日間ななひごにちかんを大忌おほいみと言いつて、此この日ひが立たつまでは心こころを緩ゆるめず慎つしんだものである。時じ候こうも好よくて肥立ひだちも良よければ、六週間むろっかんたてば出でても可よいけれども大丈夫だいぢゆうぶは七十五日ななひごにちも出でないが可よからう。未まだ身からだ體たいが整ととのはないのに、輕かろはづみして外がい出しゆつしては太おほきに害がいあるものである。

▲家政

粕に漬けるので、茄子も、鹽漬の鹽抜して踏込粕に漬けるのである。

●千枚漬

これは大かぶらを薄く剥ぎて重れ、莖も葉も能く洗ひ、水分を去り、漬桶に荒昆布の敷き、其の上へ蕪菁も葉も置き、鹽と麴を撒り、薑椒

育 兒

●生殖器病を患はない爲の養生

産後の養生が悪いと、子宮病などの生殖器の病を患ふものである。それで、産後の養生は其の當座の爲めばかりでは無い。後の爲めであるから必ず十分に養生して置かなければならない。石婦と言つて子を生ない婦になるのも、此の不養生から生るのである。

○育 兒

産後の大忌が終ると、母親たる者は育兒の主任になるのである。先づ育てる初めは乳汁を飲ますことので

▲家政

を入れ、又昆布を敷き、前の様に幾重も重ねて漬け、壓石をかけるのである。

●芥子漬

これは花落の小茄子を鹽漬にして、芥子の粉と麴を混ぜて鹽を加へて、壺か桶かで漬け、蓋をして目ばりして、一月ばかり経つてから取出

育 兒

我が乳汁が出ればよいが、若し出ないか、出てもし細あつて飲ませられないときには、乳母に附けるか牛乳を飲ますか、生の牛乳が手に入らない土地ではコンデンスミルクで育てるのである。乳の粉だの磨り粉などで育てる向もあるが、左様なものには蛋白質物が含まれて居ないから、役には立たない。そんなものを飲まして安心して居ては、兒を死なして後悔をするより外は無ない。

●乳汁の等級

乳汁は母親の乳汁を第一として、乳母の乳汁が第二

▲家政

すのである。

●蘿蔔の粕漬

蘿蔔を鹽漬にして、能く漬かつたのを取り出して、日に乾して水分を能く取つて、踏込粕に鹽を加へて能く捏合せて、桶に粕を入れて蘿蔔を並べて、其の上へ又粕を置いて、蓋をして紙で蓋の周邊に目貼をして置くのである。

青 兒

で、牛乳が第三で、煉乳が第四である。母親の乳汁は兒が飲むと、其の一分は體内の血と肉との成分になり、他の一分は身體の温みを持たせるものである。乳母の乳汁も此の成分はあるけれども、どうしても母の乳汁の様にはいかない。牛乳やコンデンスミルクも矢張り此の成分は持つて居るけれども、第三等第四等と下るのである。

●乳汁を飲ます母親の食物

滋養分を含んだ乳汁を我が体内で製する母親だから多く血になる蛋白質物の多い滋養物の獸肉、鳥肉、

●福引景品の撰擇

福引は多く和氣霽々たる祝賀の席の餘興として用ひるものなれば最も滑稽趣味のあるのが面白い。されど猥褻なものや人に不快なる念を起さすものはよろしくない、されば茲に最も興味ある問題を集め

▲福引

青 兒

魚肉類で消化の良い物を程よく野菜をあしらつて飯に添へて食なければならぬ。肉類ばかりを食ると却つて乳汁の出が悪くていけない。米の飯や麵包などの粉の多い物を肉類に雜せて食ると乳汁が能く出る。其の他では牛乳、鶏卵、鰻鮓、蕎麥、葛粉、芋類、肉汁、魚の味噌汁、菓子類、砂糖などを過ぎないやうに食するが可いのである。焦げた物、酸い物、鹹い物常に食つけない物は食ないがよい。

●乳汁を飲ます母親の食物

飲食物も注意して害にならない物を用ゐなければなら

▲福引

- て掲げて見よう
- 夕顔棚の此方より現れ出でたる
- バケツ見て伏せ(あけち)
- 明智光秀(【景品】)
- バケツ
- 三十振袖(【景品】)
- 四十島
- 田
- ニヤワン(似合はぬ)
- 【景品】玩具の猫と犬
- さてもゆかしや琴

育 兒

ない。乳汁を飲まずと大層喉が渴くものである。左様なときには清水を一回沸して冷ました物を飲むが可い。清水は血を清らかにして乳汁の出方を多くするからである。又、水の他では牛乳、煎茶、抹茶、珈琲などが良い。酒類や酒氣を含んだもの、醗酵性物、香料入の物などは飲んではいけない。母親が酒類を飲めば直ぐと兒に害になつて驚風病が發ることがある。

●母親が病氣で藥を服めば乳汁の變化を起して子が害を受ける。依て左様なときには醫者に乳汁を調べてもよい、飲ましてもよいとの差圖を受け許さなければ哺ますずに、乳母に付けるか牛乳を飲ますかするのである。

●乳汁の規則時間

乳汁を飲む兒は習慣づき易いものだから、規則を正しくして良い慣習を付けなければならぬ。總て習慣を付けるのは初めにあることで、産後に始めて乳汁を飲ますときから二時間おきに哺ますとして、其の間には何ほど泣いても哺ますないが可い。泣くの

▲福引

- の音
- コロリンチヤン(【景品】)
- 小土瓶と茶碗
- 古池や蛙飛びこむ水の音
- どんぶり(【景品】)
- 井
- 驚鳴かしたこともある
- 【景品】梅干
- 若しや外に増す花がと女房は

育 兒

▲福引

木(氣)を揉む【景

品】錐

●京の名所

翠隠し(金剛寺)

【景品】きんかくし

又は懐鼻襪

●井戸端會議の議長

又は能辯家

能くシヤール(

喋舌る)【景品】玩

具のサーベル

●由良の助の出る狂

育 兒

は赤子の語で、強ち乳汁を嘔みたいばかりの催促では無い。それで初めは少し聞辛くても堪へて、背でも密と打きつけて時間を立たせて、ごうでも規則通りに二時間おきに、嘔ますのが可いのである。併し又襠褌が濡れて心わるいのか、或は腹が痛むのかで泣くのかも知れないから、それも調べなければならぬ。

●哺乳の量を守る事

乳汁は嘔まし過るよりは嘔まし足りないのが好いのである。何故なれば消化すだけより消化さないのに

言

提灯ぶら 忠臣藏

【景品】ぶら提灯

●うまいことばかり

言つて

また蚊帳(綾)つら

れた【景品】蚊帳の

つりて

●年増の藝者

癖がよつても粹(

酸)はぬけぬ【景

品】梅干

▲福引

育 兒

過ぎた丈けは不消化になつて、子を害するからである。子が乳汁を吐すのは、多くは嘔過ぎであるが、嘔過でなくても、嘔ませて過ぐに背負ふか、抱いて腹を壓すと吐すことがある。此の様なことをすると宜しくないから、嘔まして直ぐに負はず、腹を壓すやうな抱き方をしないがよい。若し又是等の故でも無いのに吐すと思へば小兒醫者に診察して貰はなければならぬ。

●夜間乳汁の回数

二時間おきに乳汁を嘔ますことは晝の間のことで、

▲福引

- こゝはお關所
切手がなければ通
られぬ【景品】郵便
切手
- 一雙の玉手千人の
枕まくら
- 一點の朱唇萬客嘗
む【景品】赤色の郵
便切手
- 當世才子
目から鼻へぬける
【景品】山葵漬わさびづけ

育 兒

夜中はさうでは無い。夜は宵から夜明までに、始めのうちには三回嘔ましてよい。それは宵と、夜半と、夜明との三回嘔ますのである。斯うして一二ヶ月も経てば、三回嘔ましたのを二回にして、それから後は一回にし、又其の後は、夜は一回も嘔まさなくてよいのである。それでも泣くと嘔ましたくなるが嘔ましては悪い癖が付くから、少しぐらゐは泣いても、打きつけて寝かすが可い。さて斯様に夜中に三回、日が経てば二回、又一回を定めても、子が寝入つて居て、時刻に起きなければ、強て起さずに、其

▲福引

- かさゝぎの渡せる
橋におく霜の
白きを見れば夜ぞ
更けにける【景品】
炭團たんたん
- 坊はほんどに
荒い子だ【景品】洗
粉
- 惚れ合つた間
すいて見ゆる【景
品】玻璃瓶からすびん
- 由良さん此方

育 兒

のまゝで寝かして置くのが可いのである。眼が覺めたときに嘔ますがよい。

●片乳を嘔まさない事
片一方の乳汁ばかりを嘔ますと、自然と偏乳になる。依て両方の乳汁を代るゝ嘔ますが可い。さうすれば兒も習慣になつて、兒が自分で乳を彼此と換へるやうになる。さうなれば飯過を避ける利益がなる。

●乳汁を嘔ます母親の体内に水分
が減つたときの心得
母親が兒に乳汁を嘔まして居るうちに喉が渴いたり

▲福 引

毛のある方を（手の鳴る方へ）【景品】横揚子（揚子を使ひ眞似をする）

●小學校教員

左右々々【景品】

酒と餅

●わたしや蠟燭、心から燃ゆる

主はランプで口ばかり【景品】洋燈

貧乏人の懐中

車

●本街道は一と筋、

ピイ／＼風車【景品】玩具の笛と風

車

●

●

●

左様だ々々【景品】

曹達

●明治の鬼將軍

佐藤少將【景品】砂糖少々

●

●西は稻川關

火箸は鐵が竹（東

▲福 引

育 兒

胸部や背部の邊りが心持わるくなることがある。これは体内に水分が減つたのであるから、体外から水分を求めなければならぬ。それで、斯ういふときには茶でも砂糖水でも呑んで、一時は乳を哺乳するのを休めるが可い。

●舊來の夜乳の害ある事

夜乳と言つて兒に添臥して乳汁を哺乳するのは宜しくない。何故と言ふに、前に述べたやうに規則が無く、定りなく夜哺乳を哺乳します習慣が付いて宜しくな、或はこの鼻の孔を乳房で塞ぐことが無いとも言

へない。依て冬などの寒い夜には、母親の肌で寢床を温めながら寢かしつけて、兒が寢入つたれば密と脱けて出て、別の自己の寢床で寢るが可い。さうして兒の足元が冷る恐れがあれば、懷爐でも湯婆でも入れて温めれば可い。炬燵は炭氣を吐くから、決して入れてはならない。

●乳汁を哺乳する母親妊娠のときの心得

兒に乳汁を哺乳するうちに母親が妊娠したれば、兒に乳汁を哺乳する必要があつても、其の乳汁は決して哺乳してはならない。これは子に害があるばかりで無

▲福引

は鐵ヶ嶽【景品】
竹箸

●飛切無類大極上々の別嬪

それはステツキ(素敵)でせう【景品】
洋杖

●内氣の人

萬事ひかへる【景品】
【雑記帳】

●天川屋義平

男でござんす【景品】

育 兒

くて、母たる親が胎内の兒を流産する。

●乳母の待遇

乳母は切な哺を托け任す者だから、良いのを探んで雇はなければならぬこと、その乳は産科醫に檢べて貰はなければならぬ。さうして良いのを雇つたなれば、大切に待遇ひ過ぎて増長させてはならない。且又是れまで忙がしく勞動して居た者を俄に逸をさせ、粗食を食て居たものに際立つて美味い物を食さすのもいけない。さうすると慣習が激しく變つて乳汁を變化させる恐れがあるから、雇入れの初

贖鼻禪

●山出も今は漸く東京なれて

鉛(訛)が少い【景品】

●御園おしろい

●兒島高德隱岐の行

在所に忍び入り

水を削つて書く

【景品】鉛筆

●無精者鼻液を拭はずに

硯(啜)り上げる【

▲福引

育 兒

めから、以前の習慣を變へさせずに、漸次に慣れさせて、襪襪を洗ふなどのことはさせるがよい

●乳母の監視

乳母に兒の哺乳役を托したれば、托しきりにしないで、能く監視しなければならぬ。實母が兒に乳汁を哺ますときの飲食の養生、乳汁を哺ますのに二時間おきの事、哺まし方、兒の寢床を温めて寢かすこと、兒と同衾しないこと、添臥して寢入ながら乳汁を哺ますない事、是等を守るか守らないかを監視するのである

▲福引

【景品】硯

●犬に着物

煙管(着せる)に及

ばぬ(景品)巻營草

●臆病者の罌丸

上がつたり下がつ

たり【景品】寒暖計

●お釋迦様の生まれ

た國

それはペン軸(天

竺) 景品)ペン軸

●正に相違御座無く

育 兒

●牛乳を哺まして育てる心得

牛乳は良いのを選んで哺まさせなければならぬ。さうして生兒に初めに哺ますのは、淡い方がよいから最初一ヶ月の間は朝搾の牛乳を哺まし、後には濃いのが良いから夕搾のものを哺ますが可いのである。

牛乳で兒を育てるのは逸なやうに思はれるが、實母の乳汁や乳母の乳汁で育てるよりは深く注意しなければならぬことである。何故かと言へば、牛乳は人の乳汁よりは速く腐る。其の上用いた哺乳器の洗ひ方が行届かないと、其の洗ひ残した牛乳の腐敗物から大變な害を生ずる依て能く洗はなければならぬ。

候也

【景品】鏡

●内所の事を素ッ破ぬかれ

赤くなつたり青く

なつたり【景品】赤

と青との色鉛筆

●娼妓の前借金

尻で消す【景品】消

ゴム附の鉛筆

●何うも此頃は風の氣味で

▲福引

兒 育

生の牛乳を其のまゝで哺ましては害するから、搾りたての牛乳でも二三十分間煮立たせて哺ますことである。二十三分間煮るうちに、煮上つてから五分間以上経つて乳脂を去り、それを清潔な壺に入れて、栓を緊くして蓄へて置いて、哺ますときは哺ます分量だけを出して、尙ほ水を混ぜて、淡めて哺ますのである。

牛乳屋は一合壺で配達する。其の壺の栓を綿栓と

▲福 引

ハツクセン【景品】
白扇

●七つの鐘を六つ聞
いて、残る一つが冥
土への土産

ホーン【景品】盆

●お三どん棚から皿
をおつことし
かけたりわつたり

【景品】算盤

●霜夜の寒風に按摩
凍にて

氷砂糖(凍り座頭)

兒 育

仕かへて、平鍋に湯を煮立たせて、それへ入れて湯煎をして、煮立て、置くがよい斯うして置けば、栓さへ取らなければ決して腐らないものであるさうして置いて要るときに一本づゝ温めて用ゐるのである。

牛乳は水を和せて淡めなければ強過ぎるものだから、どうしても淡めなければならぬ。其の和る水の分量は、兒が成長するに應じて少なくて、乳汁を濃くするのである、さうして淡め方の割合は、生れてから後一ヶ月より三ヶ月までの兒には、牛乳一

▲福 引

●精神一たび到らば
何事か成らざらん

通さにやおかぬ

【景品】千枚通

●先づ〜二百十日
も無事で

荒れ知らずかぬ

【景品】リスリン

●お轉婆娘

はねつかへる

【景品】護謨毬

●男女の深い情交

兒 育

合に水三合でそれが四ヶ月から六ヶ月までとなる。水を牛乳の二倍和せて、七ヶ月から九ヶ月までは牛乳と水を等分にして、牛乳一合に水一合の割にして、十ヶ月から十二ヶ月までは、水を牛乳の半分として淡めるのである。

哺ましはじめに水を牛乳の三倍も和せては、甘みが淡くて兒が水くさがる。それで砂糖を茶匙に一杯ぐらゐ入れるのである。さて又、育て初めには水を混ぜるが、おひく〜と成長して、濃くして哺ますときには、飯の取湯などを和るがよい。牛乳を温める

▲福引

切つても切れぬ【景品】錆びた鉄

●武士に向つて無禮千萬、其處動くな

切つてしまへ【景品】切手四枚

●有り難き御代や道中眞ッ株

【景品】郵便端書

●淫亂な後家方々へ水をむける

【景品】如露

育 兒

度合は、人の乳汁の温かさほごにするのである。

前に言つた淡め方は一般の標準だけで、何の兒も

一樣とはいけない。育ち方の速い兒も、遅い兒も同

じことにしろと言ふのでは無い。育ちの速い強壯な

兒には、和る水の分量を少なくし、育ちの遅い兒に

は、水の分量を多くして淡めると云ふやうに、育ち

に依つて斟酌をしなければならぬ。育ちの速い極

強壯な兒ならば、水を和らずに牛乳ばかりを哺ませて

もよいのである。

淡め方ばかりで無くて、哺ます分量も、育ちはじ

▲福引

●神無月の出雲

髪(神)をよせる【景品】櫛

●藝妓の慾望

お鼻(纏頭)を欲しがる【景品】お多福

の面

●猫の手洗

なめてかく(掻く)

【景品】鉛筆

●細君の妊娠

鳴ア身持(鏡餅)

育 兒

めよりは成長するに應じて多くしななければならない
西洋の大醫が定めた一般の標準は、生れた其の日に
普通の盃猪口に三杯を十回に用ゐ、二日目には十杯
を十回に、三日目には一回に盃猪口に二杯半づゝで
晝夜に十回、これで晝夜に凡そ一合四勺で、四日目
からは七日目までに一晝夜に三合三勺を十回に、三
週間目から四週間目までは矢張り三合三勺を一晝夜
九回に、三ヶ月目には三合三勺を一晝夜七回に、三
ヶ月目には三合三勺を一晝夜六回に、四ヶ月目から
八ヶ月目までは四合四勺を一晝夜七回に、九ヶ月目

▲福引

●景品 鏡餅

●悪縁

摺れては火つく(引附く)【景品】燐寸

●美しき女の姿

鏡

目につく【景品】眼

鏡

●氣障なお客に口説かれ

かれ

ドンと肱當【景品】

肱當團

育 兒

から十二ヶ月目までは、一回に凡そ一分五勺づゝ、晝夜五回に哺ますと言はれた。

牛乳の哺乳器を兒に與へて置く時間は、十分間から十五分間まで、ある。さうではあるが、兒が哺み飽きたやうなれば、直ぐと離しても可い。離して哺乳器に残つた牛乳は捨てるがよいのに、再び温めて哺ますのは大きに悪い。何故ならば僅の間でも牛乳が腐るからである。それで護謨の管紐に付いた乳首護謨を、兒の口に入れて置くのはまことに危険である。依て吸ひ止めば直ぐと取はなすのがよいのである。

●澤庵大根

暮(年末)になると

(點)漬けるもる

【景品】洋燈

●子守女

おろせば辛身(空身)になる【景品】

山蔡又は大根

●惚れた同士の仲ぢ

やもの

六つ燐寸(睦しき)

は當り前【景品】

▲福引

育 兒

夏は配達した牛乳の壘を、汲立の水に冷して置くか、或は紐で括つて井戸へ釣り下げて冷して置くがよい。併し水に冷して置くのは、時々其の水を換へることである。

哺乳器は、臥かす壘で管紐の長いよりは、堅壘で管紐の短いのを手に持つて哺ますのが良い。これだと兒に壘を預けて置けないから、監督が行届ゐてよいさうして目が盛つてあるから、牛汁の分量も知れてよい。それに着いてある護謨の乳首は、孔が大

▲福引

熨斗六個

●樺太の北緯五十度

日本の端【景品】著

二本

●恵比壽、大黒

掛くの紙(福の神)

【景品】天狗帳また

は塵紙

●白鼠いつか帳尻を

誤魔化して

穴を明ける【景品】

錐

育 兒

きすぎず小さ過ぎないのを選択しなければならぬ
それが柔かくなつたら腐つたのだから、注意して時
々取換へなければならぬ。

哺乳器は良いのを選んで、能く掃除しなければ
ならない。壺でも護謨の紐でも乳首でも、白い汁が
出ないところまで清潔に洗ふのである。哺乳器は二
つ三つも備へて、前に洗つたものを取換へて、前に
洗つたものから使つて、循環して使ふがよい。洗ふ
のは成丈け朝洗つて、壺も管も立てかけて能く水を
滴らして置くがよい。

▲福引

●往きには道伴があ

りましたが

歸りにはたゞ一人

【景品】往復葉書

●世界の一等國の中

には

二本(日本)がはい

る【景品】著籍

●まだ十四だといふ

に好嫉とは

ホヤ(オヤ

く)【景品】ホヤ

育 兒

哺乳器は掃除が悪いと危険なものだから、兒が成
長して匙か茶碗で哺ませるやうになれば、哺乳器で
哺ますことは止して、匙か茶碗で哺ますのがよいの
である。

●コンデンスミルク

これは溶いて哺乳器で哺ますのである。これも牛乳
同様に哺乳器を能く掃除しなければならない。尤も
良いのを選んで用ゐなければならぬ。これは色が
白くて、ねつとりとしたのが良いので、黄色がかつ
たのは悪いのである。

▲福引

- 身受された披露目みうけ
- に わざと石盤せきばん(赤飯)
- を【景品】石盤
- 谷間の櫻たにま
- 鼻はな(花)がひくい
- 【景品】おかめの面ひん
- 貧ひんからの自殺じさつ
- きけばきく程涙ほどなみだの
- 種なかつた【景品】辛子からし
- 長唄勸進帳ながうた
- 大薩摩【景品】大きおほさつ

育 兒

コンデンスミルクは、砂糖が平均四割餘も混つてあるから、牛乳とは消化が悪い。それで餘程水を澤山和せて淡めなければならぬ。兒に哺まし初めの三ヶ月間は、水をミルクの廿二倍和せて淡め、四ヶ月目から八ヶ月目までの間は十八倍、それより後は十二倍に淡めて可い。これは水で淡めるよりは、温湯で淡める方が可いのである。併し兒が哺始めてから六ヶ月の後はおも湯で淡めるが可い。

コンデンスミルクは、口を開けてから、一週間までに用ゐる盡すがよい。暑中は腐り易いから、注意し

▲福引

- 亭主の悪口いふ女なかつた
- 房は
- 口が歪む【景品】い
- ヨットコ面
- 助平男の標本へうはん
- 出及瓶でばかめ(出齒龜)
- 【景品】出及庖丁かめ
- 瓶その
- お園の思ひ出男
- それはパン七(半七)さんでせう

なければならぬ。

●黄 兒

兒が生れてから二三日経つて赤くあるべき兒が黄色になることがある。これは自然と還るものだから格別手当をするに及ばない。

●臍帯の取れ跡

これは不潔にならないやうに注意しなければならぬ。若し不潔であると、鬼灯虫と云ふ病が發つて死ぬることがある。依て必ず清潔にすべきことである。又、出臍になるといけないと言つて、熊の膽などを

▲福引

【景品】バンセツ

●御念佛

榮組板々々(南ま

いだく) 【景品】

榮と組板

●道樂息子に渡した

身代

いつか烟になる

【景品】巻煙草

●酒なくて何の己の

櫻ずみ(櫻かな)

【景品】櫻炭

育 兒

着けて其の上へ基石を置いて布で締め括つて置くが、それも宜しくない。兒は主に腹を働かして息をするものなのに、括るとそれに障るからである。

●兒に湯浴させる心得

兒に湯浴させる湯に沸す水は、清らかで能く澄んで軟水とムつて、手拭を浸して絞つても硬くならない。柔かい水を用ゐるが可い。前に言つた硬水を用ゐてはいけない。さうして湯の熱さは、ずつと手を入れ、少し低いと思ふくらゐが良い。熱い湯に浴れると、火傷をするばかりで無く、熱が發たり、瘡

▲福引

●これはお金ではござりませぬ

娘に貰らうた掛飯

【景品】握飯

●待てど暮らず、寝

るに寝られず

【景品】熨斗

熨斗待まうけ

【景品】熨斗と幣

格氣喧嘩

焼いて當てこする

【景品】裁縫用の鍔

●東京隅田川の春

育 兒

撃つたり、風を引ゐたり、咳が出たり、鼻孔が塞るやうなことが生る。依て低くしなければならぬ。兒を洗ふ手拭は、白木綿が良い。或は白いフラインネルも良い。其の上に軟かい海綿も用ゐるが良い。湯の浴せ方は、先づ湯加減を試て、兒の頭だけ出して、身体はずつぷりと湯の中へ入れて、頭は掌で受けて支へて、それから緩々と洗へば可い。顔や眼は其の盥の湯で洗つてはいけない。清らかな湯を別の器に取つて、別の手拭で洗ふのが良いのである。さうして眼を拭ふときには、眼がしらから眼じり

▲福引

櫻の皮包（櫻の川
埦【景品】櫻の埦漬
を竹皮につゝめる
もの

●両手を組み首を傾
け

漉餡（御思案）の體

【景品】漉餡の菓子

●龜井戸の天神

大根箸（太鼓橋）が

やる【景品】大根と

箸

育 兒

へ向けて拭はずに、眼じりから眼がしらへ向けて拭
ふが良い。又、兒を湯の中へ入れて置く間は五分
間から十分間までが良い。さうして兒を湯から出す
までに、他に人があれば其の者が、大きな西洋手拭
でも湯上布でも温めて置いて、兒を其の上へ受けて
、兒の身体に着いた湯の雫を、すつきりと拭つて取
つて、それから暖かい蓐に臥かすのである。

●強壯な兒ならば毎日湯に浴るもよゐが、兒に依つ
ては、湯に浴る度に咳をしたり、鼻孔を塞らせたり
するのがある。斯様な兒は一週間に一二回湯に浴れ

▲福引

●一人娘の御婚禮
定めし揚枝（養女）
を入れるのでせう

【景品】揚枝入

●新隆鼻術

此本で稽古をする

と直に鼻が高くな

ります【景品】淨瑠

璃本

●宴席に半玉を聘ん

で

尺（酌）をさす【景

育 兒

て、其の他は微温い湯で手拭を絞つて、それで拭く
が可い。

●兒の頭の痂

兒の頭には痂が生るものである。これは徒擦り落
しては宜しくない。鶏卵の蛋黄を塗るか、又は橄欖
油が、ワセリンを塗つて置いて、それを湯と石鹼と
で洗ひおとすが可い。

●兒を湯に浴れる時刻

湯に浴れる時刻は、何時頃が良いかと云ふと、寒い時
候で無ければ朝が良い。寒る時候なれば日中が良い

▲福引

- 品物尺ものさし
- 嘘か眞實かと難題うそ ほんじつか なんだい
- をもちかけて
- 木(氣)を換(引)き(き)をかひ(ひ)
- くかね【景品】鋸のこぎり
- 浮世遊うきよのあそび
- 髪剃り剃刀落しかみそり かしらおとし
- 【景品】剃刀かみそり
- 親父の強意おやぢのいけん
- 息子をしめつける
- 【景品】積鼻ふんばし
- 金庫、手文庫、用きんこ てぶんこ よう

育 兒

のである。其の他では夜の寝るときが良い。併し、時刻が良いと言つても、寝て居る兒を故と起して湯に浴るのは宜しくない。

●兒の頭巾の心得

寒い時分でも、兒に頭巾を被せ詰にして置くのは宜しくない。全体頭は涼しくするのが良いのである。依て頭巾は空氣が通る粗編の毛糸編などが良い。それも寒い時分に外へ出るときだけ被せて、家に居るときには被せなひ方が良いのである。何故に被せ詰にして置くのが悪ひかと云ふと、頭を蒸して頭の皮膚を薄くする害ばかりで無く、蒸發を妨げて風邪の因を起すからである。

▲福引

- 單筒たんづつ
- 大事な物をしまふ
- 【景品】女の湯巻おんなのゆまき
- 身上持の好い女しんじやうもちのこのよいおんな
- 房
- 黒くなつて夜までくろくなつてよるまで
- 働く【景品】鍋はたらく【景品】なべ
- 春の陣田川はる すみだがは
- 材とレース (短艇競漕) 【景品】ステッキとレースしんせいのりす (たうりやうきやう) 【景品】ステッキとレース
- 電車の救助網でんしゃのきうすうあみ

育 兒

●兒の衣服の心得

兒の衣服は、木綿かフランネルかで製へるが良い。それで動き易くて濶かくさへあれば何枚も重ねて着せなひが良いあまり數重ねて着せると動きにくくて身体の爲めに宜しくない、第一成長を妨げるから、ふわりと緩やかに着せて、紐の締方を寛りとして置くのが良いのである。殊に寢衣は輕くて、手足が自由ゆつとに動くやうにして置くのが良いのである。

▲福引

前へ垂れへ【景品】
前垂

●道楽番頭の帳尻

ドコニにか穴があ

る【景品】女の湯巻

●桃中軒雲右衛門と

吉田奈良丸

菜二把節(浪花節)

【景品】菜二把と鯉

節

●槍の仕合

ボン／＼と突く

育 兒

●兒の便通

赤兒は一晝夜に二回から四回まで大便をするものである。小便をする回数はこれより多い。若し青便と云つて青い便が出たれば、早速醫者に診斷を請ふことである。尙又二三日も便通が無ければ、灌腸をして貰ふが可い。

總じて兒の大小便が通じたときには、微温湯で布を絞つて、清らかに拭取つて、爛れるやうなれば、天瓜粉を撒かけて置くがよい。

●兒の外出

▲福引

●景品【手鞠】
御年玉

落し玉(御年玉)

●景品【鶏卵】

●お髭の塵

胡麻(胡魔)をすつ

たり味噌をつけた

り【景品】櫛鉢と櫛

子木

●出過ぎ者何かといつ

ては

だしに使はれる

育 兒

赤兒は皮膚が薄くて弱いから、寒る空氣に觸れてはいけない。それだから外へ伴れて出るのは餘程氣を付けて、暖かな好ひ天氣の日で無ければ伴れて出ないがよい。縦し又暖かい日でも、日の光が強くて眩い所へ伴れて行くのは宜しくない。それで、兒が生れてからも後、初めて伴れて出るのは、四五十日も経つてからで無くては宜しくない。それも春の末か夏の初かの暖かい日なれば半時間ぐらゐは伴れて出ても可い。寒い日でも衣服さへ澤山着せれば可いと思ふが、それは宜しくない。何ほご衣服を澤山着て

▲福引

- 景品】鯉節
- 鼻垂の亭主、鳴大明神と崇め奉り
- 何時も尻に敷かれ
- る【景品】座蒲團又は土瓶敷
- 辻君は暗い所に立ちて
- 人目忍びてコソ
- と引く【景品】花札
- 藤屋伊左衛門
- 酸いけづる(粹)で

育兒

も、冷たい空気を呼吸するから、咽喉や氣管を患ふことがあるからいけないのである。

●兒の睡眠に就ての心得

能く睡る兒は強健である。其の理由は、全体赤子と云ふものは腦の發育が十分で無いので、如何しても多く睡らなければならぬ。依て十分睡らせるが可い。それだから寝て居るうちは成る丈け静にして、兒の眼を覺さないやうにしなければならぬ。されば寝かゝりには、能く寝入るやうに、附紐を解いて置くが可し、寝た上へ覆る物は、糊氣の無い柔かな

▲福引

- 身を詰められる【景品】鮓の折詰
- 地圖
- 海もあり陸もあり
- 【景品】硯
- 好いた男女の間
- たとへ離れても時々濡れ合ふ【景品】釣瓶一對
- 容貌好み
- 首で苦勞する【景品】筆

育兒

木綿物が良い。今一、二、三等は毛織物が良いのである。

枕は柔かたで高くないものを用ゐて、頭の先にさせるよりは頸もとに近よせてさせるが可い。それは何故かと云ふと、頭の先へ枕をさせると、息の通ひを妨げるからである。

●兒の口中を洗ふ事

兒は生れてから半年許経つと、下顎に前齒が二枚生えはじめて、それから後には上顎にも前齒が四枚生えて、それから追々と他の齒が生えて、早いのは二年半、晩いのは三年目に奥齒まで生え揃ふものである。

▲福引

●海水浴

煽いで(泳いで)涼

しい【景品】團扇又

は扇子

●勝負のない相撲

両方へ引き分ける

【景品】毛筋立

●吝嗇まで、はない

が

それではハンケチ

(半吝)だ【景品】ハ

ンカチーフ

育 兒

る。此の齒の數が二十枚で、それを乳齒で云ふのとある。それが六七歳になると、食齒と云ふ眞個の齒に生えかはるのである。さて乳齒の生える頃には、いろ／＼の徴候があつて、物を嚙りたがつて泣るものである。此の時には、甜りこ、東京邊では、おしやぶりと云ふ物を嘗めさせる。これは齒齦が痛んだり痒くなるので、何か嘗めたくなるのに、甜りこなごを嘗めると、痛みも痒みも、じつと落着くからである。護謨の板は嘗りこなごよりは宜しい。おしやぶやをよく時分には、日に何回も、微温湯

●惚れる格氣

釣られながらにチ

ン／＼云つて居る

【景品】八角時計

●惚樂の製造所

昔からお極りの佐

渡(砂糖)【景品】砂

糖一袋

●弱い上戸

直に尻を垂れる(

平倒れる)【景品】

薩摩芋(成るべく

▲福引

育 兒

に浸した柔かい布で口中を洗ふが良い。これは此の時分ばかりで無く、成長してからでも齒の周圍を掃除するが可いのである。斯うすれば齲齒にならなくて齒も痛まず、齒が強くなるからである。

●乳離れ後兒の食事の心得

乳離れと言つて乳汁を哺むのを止めさせるのは大切なことである。此の乳離れの爲めに、悪くすると子が衰弱をしたり、又は死ぬやうなことがある。さて兒は、何年乳汁を哺んで居ても害にはならないが、それでは哺ます母親が堪らない。依て大概限りを付

▲福引

- はふかせるもの
- 狐の放屁
- コン／＼さんの屁
- だからコンプー(昆布)
- 御馳走の度に御用を云ひつかり
- へい小楊子【景品】
- 小楊子
- 好いた同士互に顔を見合せて
- ニツコリ(二行李)

育 兒

けて止めさせるのである。されば、齒が生え初けたれば、如何様物から食させて可ひかど云ふと、牛乳粥面、ビスケット、肉汁などを食させるのである。是等の物を食つけさすやうになると、追々と漸次に乳汁の哺まし方を減して、後には朝夕と夜間丈け乳汁を哺まして、他の食物の量を増し、又其の後は夜間け乳汁を哺ますやうにして、二年間経つまでには全く乳汁を哺ませないやうにしなければならぬ。さて舊來は、生れから百二十日目に食物と云ふことをして、其の後に乳汁を哺まして居てもし乳汁の他に

▲福引

- カぬ景品(行李二個)
- 全勝の力士
- 土つかす【景品】上草履
- 武士の大小
- さして出る【景品】傘
- 苦海十年花ごころも
- それは如雨露(女郎)でせう【景品】
- 如雨露

育 兒

粥を食させ、其の菜には魚の刺肉や柔かい打き肉、又麵包などを汁に入れて消化れ易くして食させるのである。これに慣れて日が経てば、飯を食させても可いのである。もう誕生過になると、茶を飲ませても、豆類や芋類を食させても可い。菓子も食させても可いが、あまり甘過るものは宜しくない。此の頃には未だ團子や餅や果實類や香の物や、總て脂濃い物不消化な物は食させられない。さうして又心得なければならぬことがある。それは何かと云ふと、兒が親や乳母と一所に物を食ると、大人の食る物も

▲福 引

- 彌次郎兵衛の義兄弟
- 下駄鉢(喜多八)
- 景品下駄と鉢
- 喜多八の義兄弟
- 與次郎兵衛(彌次郎兵衛)
- 景品玩具の與次郎兵衛
- 神無月の出雲の大社
- 諸々の紙(神)が集る【景品】紙屑籠

家 庭 教 育

構はずに、不消化物でも食て悪い物でも、つい食たり食させたりするものである。見せなければ欲がらないから、大人が食事をする時には、兒は戶外へ伴れて出るやうにして、兒は別に食事をさせるが可い

○家 庭 教 育

教育には三種ある。其の内の体育は前に育兒として述べて置いた。家庭教育としては、智育德育である。これは兩親が家庭學校長兼教師になつて兒を教へなければならぬ。けれども父は家業が忙がしくて、

▲福 引

- 一攫千金
- 濡手で泡(粟)の摺
- 取り【景品】石鹼
- 不老不死の藥
- そんなものは無し
- (梨)【景品】梨
- 當世紳士
- 胡麻菓子(胡魔化)
- 【景品】胡魔の入
- 子
- 齒無しの子食ひ
- 丸吞【景品】丸鑿

家 庭 教 育

専ら兒の教師をして居られない。母は多く兒の傍に居るのだから、校長兼教師を引受けて、家庭教育の主任にならなければならないのである。

●兩親の行爲は殊に兒の鏡なる事

兒は「己」に接する者の行爲を見習ふもので、兩親は別して自己が信用することが深いから、兩親の行爲は何でも善いと信じざるものである、依て親たる者は兒の爲めの鏡だと思つて、身の行爲に心を用いて行狀を善くしなければならぬ。これが德育の本である。其の次には兒の兄弟などを總ての家人、殊に

▲福引

- 秋の紅葉あきもみぢ
- 歯葉が美くなる【は景品】齒磨はみがき
- 見合みあひ
- 鳴ア見【な景品】鏡かがみ
- 二股武士ふたまたし
- 両方へつく【りょう景品】
羽織の紐はおりひも
- 八重垣姫やへがきひめ
- 兵古うへいこ（廻向）せう
とてお姿を【へいこ景品】
兵兒帶へいこおび

家庭教育

乳母あれば乳母、子守があれば子守と云ふやうな、
 兒の身に常に接近して傍つて居る者も、兒の鏡にな
 るから、兩親は其の人物を擇むのは勿論の事で、又
 其の次には近所の人柄の善い地に住み、兒の遊び友
 だちは取分け善い友を擇んで交らせ、悪い友は避け
 させなければならぬ。

●家内に風波を起てない事

家内が平和で生活するのは兒の爲めに良い教育である
 然るに家内に風波を起たせては、兒が不愉快を感じ
 るばかりでなく、悪い根性を發させる因になるら

▲福引

- 素見客ひやかしきやく
- 品買はん【しな景品】支
那袍しな
- 曾我兄弟漸く本望ほんもう
を遂げほんもう
- 封じの巻紙ふうじ（富士
の牧狩）（ふじ景品）封
筒と巻紙ふうとう
- 彌生の嵐やよひ
- 鼻を拭くはな（花を吹
く）【はな景品】塵紙ちんし
- 巫山戯るネー、水よざけ

兩親たる者は第一に慎まなければならぬ。

●兒に命令を聽かせる良習慣

を付ける事

兒が親の命令を聽かないのは、赤兒の時から兒が強
 請るのを親が「さうかく」。可哀さうに「なごと言
 つて曲げて聽き入れるからである。これは乳汁を哺
 めす時分に、兒に親は自己の意に従ふものとの觀念
 を生させるに始まるのだから、母が乳汁を哺ます始
 めに、規則を立て、子に従はない様、兒にも親に
 は従ふべきもので、従はせられないものとの觀念を

家庭教育

▲福引

- 何時迄も佛頂面いつまで長ながくふくれる【景品】長い護謨風船
- 相場師の破産はさんすつて黒くろう(苦勞)
- 二百十日
- 振(降)たり吹ふいたり
- 【景品】鈴と笛
- 人力車夫じんりき
- 馳(掛)けたり引ひ(減)いたひたり【景品】

家庭教育

恐ろしく思ふ形かたちの物を見せるのは悪い。

●兒の賞罰

兒を叱しかるのに、親おやが自己じ己ごの腹立はらたちに任まかせて罵ののつたり打う擲ちやするのはいけない。過失あやまちがあつたれば、其その過失あやまちつ故もとを能よく取調とべて、道理道理を言いひ聞きけて改あらめさせるが可よい。決して残酷ざんこくなことに涉わたつてはいけない又、譽ほめるにも、幼ちひさい兒こは、莞にこやかな顔かほつきを見みせ、又または詞ことばで満足まんぞくする様やうに賞ほめ、或あるひは菓子くわしや玩具おもちゃを與あたへて賞ほめるがよいが、賞ほめ過すぎて誇ほこる心こころを生おこすのは甚はなだ宜よろしくない。

▲福引

- 女の雲脂あたま天窓あたま櫛くしで搔かくから櫛搔くし【景品】串柿
- 手強くじまい口説方くじま
- 劔はねられても又當ある
- 【景品】羽子板うしと羽子
- ちあれた赤毛あか
- 困こまつた毛こま(小松簞)
- 【景品】小こき松簞
- 猫ねこお客お客きやくにだまされる

家庭教育

●玩具に就ての心得

玩具がんぐは智慧ちゑを開ひらくに益ひきの無ない物ものや、悪わるい心こころを生おこさせる物ものや、危あぶ険ない害がいになる物ものを持もたさないのは言いふまでも無ない事ことで、爲ためめになる物ものを持もたせて、それを使つかつた後のちは能よく收しまふ慣習くせを付つけるがよい。玩具がんぐはよく毀こわすが、これは兒こ童どうが玩具がんぐの組立くみたてを檢しらべる心こころから生おこるので、智ち識しきを得わるに必要ひつ要ようだから、毀こわしたとて叱しかつてはいけない。依よつて玩具がんぐは毀こわしてもよい、價わ安やすい爲ためめになる物ものが良よいのである。

●言ことばづかひを正ただしくして聞きかす事こと

▲福 引

- 甘い猫【景品】砂糖製あまねこの猫
- 一人息子の母親はひとりこ柔らかなで甘い【景品】水飴
- 勉強の料理屋べんきやうお椀猪口わんちやく(御安直)
- 【景品】梳と猪口
- 阿波の十郎左衛門あはの娘むすめ
- おつると申します【景品】土瓶の釣

家 庭 教 育

兒には正しい言づかひをして聞かすことである。左なくば兒が成長してから、矯め正しくゐるものであるから。

● 兒の就學又は就學後に就ての心得

兒が満六歳になれば小學校へ入れるのだが、生育が足りないのに入れてはいけなから、醫者に診て貰つて、入れてもよいと言へば入學させるがよい。満六歳だとして、其のまゝで入學させてはいけない。さて入學しても、過度の勉強をさせてはいけない。まだ腦が発達して無ひから病身者になる、又、年齢の

▲福 引

- 徳川の名奉行めいぶけう
- 一膳の紙せんかみ(越前の守)【景品】膳一つと紙
- 羽柴筑前の守はしばちくぜんかみ
- 大根干たいこんひてよし(大関秀吉)【景品】乾大根
- 消樂息子の金を女しょうらくむすこが
- 吸ひ取る【景品】吸取紙

家 庭 教 育

● 家庭と小學校との連絡

割合に能く出来ても、それは腦の早熟と云つて一種の病だから、親が賞め立て、は甚だ宜しくない。兒が嬉しがつて、過度の勉強をして、病人になつて死ぬかも知れない。さて又成績が悪いとて、一概に怠けた結果と思はずに、其の原因を調べなければならぬ。家庭の事情に由つて成績が良くないこともあり、身体が弱い爲めのもあり、生れつき愚かなものもあり、いろいろあるから、其の原因に由つて成績が良くなるやうに、意を運らさなければならぬ。

▲福引

- 可愛い子には足袋(旅)をさし
- 【景品】足袋と尺度
- 狐の施行
- コン〜さんの旅
- だから紺足袋(景品)紺糸袋
- 反古の帳面
- 【景品】桐葉書
- 人目にかゝらぬうちに、オ、

家庭教育

兒を學校へ通學せられたれば、母親はそれに安心して、教育は行届くものと思つてはならない。全体小學の教育は、母親が爲すべきことであるが、今の日本の程度では、一般の主婦の多くは學識も不十分で、其の上家事が忙しいから、止むを得ず學校に托むのである。○すると家庭は學校の本で、學校は家庭の末、主婦は受持教員の地位に在つて、學校の監督をして、兒が學校から自宅へ歸れば、兒の授業を受持つものと思つてよい。斯くも學校教員と一致して兒を教育することであるから、學校の教へが足りない所は、

▲福引

- 掃除(サウジヤ)
- 【景品】帚
- 道中不用心
- それは女の一人足
- 袋かね【景品】女足袋一足
- 自投の番人
- 河岸端で番をする
- から河岸番(菓子)
- 麵包(景品)菓子
- 麵包
- 寝られぬまゝの散

家庭教育

母親が補つて教へるのだが、それでも家庭で教へられない所は、學校で教を補はせるのである。○それで母親たる者は、暇があれば學校の授業ぶりを參觀して、教育の様子を心得て、通信簿があるから、通信すべきことは家庭と學校と通信しあつて、子女の利益を圖ることである。○

●兒に良習慣を付ける事

兒には良い慣習を付けなければならぬ。其の良習慣は、先づ朝早く起ること、時間を守ること、規律順序を立てること、物事をきつしりすること、清

▲福引

歩

ブラ／＼と夜歩き
す(景品)提灯

●女郎の手管

口先ばかりでフウ

フウ(夫婦)といふ

【景品】酸漿

●近江八景の一

堅田の落雁【景品】

堅包と落雁

●巾着切の袋たゞき

掏摸罰【景品】楯鉢

住居

潔を好むこと、質素の風を好むこと、是等の良い習慣を付けなければならぬ。

○住居

家を建て、住まふも、賃借をして住ふも、住む家として、飲料水の手の手、日あたり、其の他住居に就ての良否は知つて住はなければならぬ。

●住居地

住まふ家屋の位置は、第一衛生に適ふところを擇まなければならぬ。尙又専ら衛生を主とすることだ

▲福引

●お三どん返事ばかりして立ちせす

尻が重い【景品】玩具の達摩

具の達摩

●ヤクザ者の不平

プ／＼／＼鳴らす【景品】酸漿

●孕み女の入水

●親子ドンアリ【景品】親子井

●かゝさんの名はお弓と申します【景品】親子井

から、都會の人家の密んだ地は衛生の爲めに宜しくなくて、都會なれば町はづれか、又は田舎を至極良い住居地とする。ではあるけれども營業の都合で、市中に住まはなければならぬ者は、何ほど衛生に適つても、田舎住居をするわけには行かない。依て成るべく空氣の良い地を撰むべきことである。それで外國人の衛生家は、市中の熱鬧な地に店を開いて商賣しても、住宅は山手か海邊か、田舎みえた地に置いて、其の住地から店へ通ふことにして居る。方今都會では往々此の様にする商人もある。衛生に適

住居

▲福引

- 景品【玩具】弓
- まゝにならぬは浮世のならひ
- 飯(儘)になるのは米と麥【景品】米と麥
- 明けても暮れても雨降り
- どうもインキ(陰氣)だ【景品】洋墨
- 月下に屯す精兵五百騎

住居

ふ地を撰む標準は、凡そ左の通りである。空気の良る地、高燥の地、日光が充分に射す地、樹木が多くて日陰の温氣が無い地、水排が良い地、沼や池の近傍で無い地、墓地や火葬場などが近邊に無い地、製造場や波止場や劇場や浴場などが無い地、

●飲料水の良い地
水道の浄水が無い地で、井水を飲料水にするには、良い井水を得る地を撰むが可る。それは凡そ左の通りの地である。

▲福引

- 影共に煎餅(千兵)
- 【景品】煎餅
- 盲目の片思ひ
- 戀座領【景品】珈琲砂糖
- 土用の日中
- 紐(目も)長い【景品】長き羽織紐
- 行政整理の目的
- 経費削減【景品】罫紙と石鹸
- 電車の救助網

住居

井の近傍に不潔な物が無い地、水が清らかで下水が充分に流れる地、地上に池や沼や其の他溜り水などの無い地、墓地や屠殺場などが近傍に無い地、空気の良い地、

●飲料水の良い地
飲料水も往々宜しくない地である。井は構造が完全で深いのを良いとする、構造の石垣の間から水が流れて入るのは害がある。

●便利
便利と利益とを圖るのは住居の肝要である。其の要

▲福引

- 前へ垂れる【景品】
- 前垂
- 寒稽古
- 麻(朝)に限る【景品】夏縹紵
- 母親の意見
- 角があつても甘い
- 【景品】金牛糖
- 秋の蟬
- ツクツク美味い
- ツクツク法師【景品】上等の菓子

住居

は凡そ左の通りである。職業上に都合のよい地、近隣の人柄が善い地、経済上買物に都合のよい地、

●家の建て方の心得

家の建て方の心得は、あら／＼左の通りである。空氣の流通を良くしなければならぬ。天井も床も高くするが可い。窓をば割合に多くするが可い。大陽の光線が通りのよい様に注意するがよい。間取に注意するが可い。廣い狭るを人數相應にするが可い。造作や裝飾を身分相應にするが可い。

▲福引

- 近衛の兵士
- 罌丸尻(禁闕)を護る【景品】猿股
- 蛙の面に水
- シヤア／＼【景品】紗
- 犬の小便
- チヨイと引つけ
- 【景品】羽織紐
- 戦の掛け引き
- 身振(進退)を播(爲)る【景品】垢播

住居

天井や床を高くして窓を多くするのは空氣の流通を良くする爲めである。大陽の光線が能く通るのは、東南向か、又は南西向を最も良いとする。正南向は其の次である。是等の向は家の周圍に日光を受ける便があつて都合がよいのである。

日當りが良くないと、家の中に濕氣が生ずる。そればかりで無く、日光の力が弱いと、害になる有様物を無くすることが出来ない。然るときにはそれが爲めに空氣が不潔になつて病氣の原因になる。尙又家の内が暗いと、何となく不愉快で陰氣になつて、

▲福引

●待合の弊八風
縮み上る「景品」縮
布

●十銭はしまいから
多分

白扇(八九銭)だら

「景品」白扇

●親を士に持つ親心

「はしたしい」景品

「親親」

●親母さん其着物は
何うなさるの

住 居

掃除をしても隅々まで判然り見えす、清潔になり
にくい憂がある。さすれば衛生に害があるばかりで無
く、保存上にも不経済になる。

●便所の心得

便所は温暖の氣に遇へば、臭氣を蒸發して健康を害
するものである。又、便所に日光が當つて人目に觸
くのは宜しくない。見て心持が悪ければ健康に害が
あるのである。依て暖氣が少なくて、日光が強く當
らなくて、其の上に人目に觸れない所に設けるのを
可いとするのである。

▲福引

坊に着せる「景品」
帽子に煙管

●夏の富士

行(雪)が少い「景
品」半袖シャツ

●主と儂は蓮の米よ
切つても切つても

切れやせぬ「景品」
骨牌

●支那への電報

カラ(唐)へかける

「景品」ネクタイ

住 居

●家屋の保存用意

家屋の保存に心が厚ければ、新築するとき念を入
れて、土臺を固くして、用ゐる材木を擇んで、年數
を永く保つ様に注意するのが肝要である、珍らしい
高價の材木を用ゐたり、奇妙な工事に金錢を費すの
は奢侈の沙汰である。

●家屋保存の二要

これは掃除と修繕とである。毎日時間を定めて掃ひ
箒き、さうして雑巾掛をするのである。それのみな
らず、毎月一回日を定めて大掃除をするのである。

▲福引

- 萬事窮し、進退谷まる
- それ河大根菜 (大困難) でござりませう【景品】大根と菜
- いつも御愉快
- 【景品】かための面
- 人間萬事塞翁の馬七輛び八起きかネ
- 【景品】起上り小法師

住居

掃除が行届かなければ、不潔物から虫を生じて早く損じさせるものである。破損したときには、小破のときに早速修繕するが可い。怠れば大修繕をしなければならぬので、大きに不経済を醸す、さて又、戸じまり火の用心は肝要である。

○家業勉勵

一家の盛衰は、主人主婦の運勢禍福にも依るが、それは人爲では何とも出来ない。依て慎深くして、第一に家業を怠らずに、必至と勉勵をしなければならぬ。

▲福引

- 黒暗々
- 眞ッ暗かネ【景品】枕
- 金瑞勳章
- 戦功によりて賜はる【景品】線香
- 一肝めしや
- 拓猪口(拓安直)
- 【景品】猪口と猪口
- 戦ひに臨んです
- それは扇四(戦死)
- 【景品】扇四本

住居

らない。此の心得は他に求めることは無い。天皇陛下が宣せられた戌申の詔書に、「忠實業ニ服シ、勤儉産ヲ治メ、惟レ信、惟レ義、惇厚俗ヲ成シ、華ヲ去リ實ニ就キ、荒怠相誡メ、自彊息マザルベシ」と仰せられたのを守れば良い。家業に勉勵しても、たゞ家業を勵むだけで、忠實を缺いではならず、勉強して儉約しても日本國の國運を發展させる爲めに金銭を貯めてそれを資本にして、業を盛んにしなければならぬ。貧乏して國の厄介にならない様にして、信義を厚うして、風儀を良くして、淫華なことを

▲福引

- 労働の本旨
これあるが爲に勤
- 【景品】パン
以下次號
- それでは蜜柑（未完）だ【景品】蜜柑
- いきな藝人
酸い（粹）を好む【景品】梅干
- 華族財産
橙（代々）受けつ
- 【景品】橙

住居

に浮はつかずに着になつて、怠け續けずに、勉強を息めなければ、自然と家は榮えて、是れこそは家庭節用の虎の巻の神髓になること請合である。それで主人は主婦に此の心得を能く言ひ聞け、夫婦心を協せて實行して、一家の男女を感化させれば、家業は榮えて、家は屹と安全になるのである。

○一家の經濟

これは世帯を持つことで、家長と主婦とが共に力を協せて失費が立たないやうにするのである。家長は

▲福引

- さても殿しき御打扮
緋絨の鎧に身を固
- 【景品】海老
わたしにも頂戴な
- 干鳥賊（欲いか）
【景品】鰯
- 學校の先生
板を背負つてゐる
- 【景品】蒲鉾
此の上もなき什合せ

家業を勉強して金を利け、或は正しく勤めて俸給を受け、主婦は其の収入金を受取つて、成るべく節儉して使ひ、奢侈と浪費とをせず、眞實に家長たる夫を輔け、家長に内の事を氣に掛けさせず、營業に一心になるやうに仕向け、収入の金額に應じて活計の切盛して、出來得る限り貯蓄をして、不時の災害に遇つたり、病氣を患つたりしたときなどは、其の費用に差支へないやうにするのである。

●一家の經濟の急不急

一家の經費と云つて、如何しても入用の費へが數々

一家の經濟

▲福 引

夫は若荷(冥加)の
至り【景品】若荷
●十八番の隠し藝
またお燕膏(株)が
始まつたかね【景
品】燕膏
●イカサマ師の口上
瓜漬(賣附)がうま
い【景品】奈良漬
●はッけよいや、の
こったく
生麩(勝負)あつた

一家の經濟

ある。此のうちに急と不急との二様がある、先づ急
用とする費用は、一家の者の健康を保つ爲めの生保
費、これは食物や衣服や、住居に就ての入費であつ
て、それから衛生費、これは病氣の發らない爲め
に防ぐことに就ての入費やら、又は、病氣で醫者へ
拂ふ薬價などである。次に税金、掛り物、又、借財
があれば其の償却に拂ふ金、それから兒が學校へ行
つて居る入用の教育費、斯様にいろいろ費用を要す
るが、其の費用に事足りて、少々でも金が餘れば、
家長の意見で資本に増すとも、貯蓄銀行へ預けると

▲福 引

【景品】生麩
●不完全の飛行機
ぞきに落ちる【景
品】洗濯石鹼
●外交談判破裂
洗湯(戦闘)の準備
【景品】石鹼と手拭
●天炎時の米相場
上つたり下つたり
【景品】寒暖計
●もうお前のやうな
者は

も、**保険金**に掛けることも、如何とも定めるのである
交際上の饗應費や、**進物の賀用**や、**或は物見遊山の
費用**などは、**金が裕**ですることだが、**交際上の事は
辛くても費すこと**あるとして、**物見遊山**だけは、**安
心な金**があつて、**無くてはしては宜しくない**。急不
急の順序は、**普通凡そ此様なものである**。

●一家經濟の心得

収入の金額より多く費ゆる生活をするのは、一家の
經濟に適はないことだから、**家長と主婦との合意で
住ぶ家屋は収入額相當の家に住ひ、衣服も相當の物**

一家の經濟

▲福 引

- かまわん【景品】鎌
- と椀
- 名刀一とふり
- 正宗【景品】正宗の
- 鑊詰
- 酒宴なかばに暗嘩
- とば
- 矢はランブー（亂
- 暴）だ【景品】洋燈
- 御隠居さんの外出
- 孫がつく【景品】さ
- と芋

一家の經濟

を用ゐ、如何に流行なればとて、家の經濟に適はな
い高價の物を買求めず、食物も價安い滋養のあるも
のを用ゐて、家人の健康を保たなければならぬ。
併し、いかに費用を減ずればとて、野菜の日まし物
や、芋類の安物などの粗物ばかりを食て居ては、滋
養分を採ることが足りなくて、身体に十分の生活力
が無くなつて、病氣に罹り易し、又、病んで藥を服
んでも、其の藥の効驗が薄い憂があるから、食費の
儉約は只だ安い物ばかりを食るのを儉約とは思へな
いのである。さて又華美なる交際や、物見遊山の快

▲福 引

- 暗嘩兩成敗
- 五分々々【景品】葱
- 印度の饑饉
- 黒くなつて干上る
- 【景品】淺草海苔
- 道樂息子の新世帯
- 行先が案じられる
- 【景品】アラ提灯
- 六分は他人
- 四分内輪【景品】滯
- 團扇
- 褒美の中味

一家の經濟

樂費などは、生計が裕かでないければ、節儉をして見
合すが可い。一日の物見遊山に愉快極まることも、後
日に至つて其の影響で、生存費に缺けるところがあ
つては、いかにも苦しいことであらう。それを能く
省みなければならぬ。
収入金額が家計の費用に足りなければ、右の様に
儉約をしなければならぬ。之れに反して
生計が裕かなものにも拘はらず、只々一途に金錢を使
ふのを惜んで、必要の費用も減じて、營養不十分と
は知りながら、常に滋養分の少ない食物を食べ、一

▲福 引

- 水(見ず)に浮く(受く)【景品】輕石
- 月に風情をマツチ山
- 【景品】燐寸澤山
- 軍人の正章
- 闇い(位)によつてつける【景品】ラン
- あの人(は)繼母かし
- 實母(は)【景品】實母

一家の經濟

家の者の健康を害し、果すべき義務も果さず、又、兒の教育も顧みず、一概に貯金をしようとするのは吝嗇である。

●小遣を書記す事

主婦の獨斷で支拂をする日用臺所向の買物代は、家長が支拂ふ諸支拂の様に多い金額では無いから、格別金額は嵩まないものと思へど、是れは却つて思ひの外に嵩むものである。何處の家でも、一圓以上の出入は目立つけれども、一錢二錢の事はあまり意に掛けないもので、五厘はまゝよ、一錢や二錢ぐらゐ

散

- 美人の袖揃ひ
- 玉揃ひ【景品】算盤
- 樺太の恨み
- 件分受けて半分返す【景品】往復はがき
- 熊谷次郎直直
- 坊主になつて世を遁る【景品】筆
- 預つた資本金
- すつて黒う(苦勞)

▲福 引

一家の經濟

と軽く思ふに依つて、ついで使ひ過すものである。塵も積もれば山を成すと云ふ諺の通り、計算をすれば驚くばかり多額に上るものである。それ故に主婦は小遣帳を製へて、物を買ふときは一々記して記してから代金を支拂ふやうにするが可い。後で帳合をするとして、先きに代金を拂つては、附け落しが出来て計算が合はない。これは面倒の様ではあるけれども、大層益がある。小遣帳を見て省れば、自然と入費を制する益があるけれども、是れが無ければ見て省ることが無い故、知らず識らず支拂金

▲福 引

- する【景品】墨筆
- 池の中の鯉
- 麩で集まる【景品】筆筒
- 成功の秘訣
- 眞棒（辛抱）が肝心
- 【景品】獨樂
- 縹緞といひ程といひ申分のなき好男子
- 女につかれる【景品】羽子板
- 無節操の政治家

一家の經濟

額は増して、大きに豫算が狂ふものである。

● 掛買してはいけない事

物を買ふのは、決して掛買はすべきことでは無い。これは誠に損なものである。掛買をすれば、都度代金を支拂ふ面倒が無し、又、時として金が無いときにも都合がよし、現金買するよりは得策だと思ふのであらうが、これは大きな誤解である。何となれば、掛賣するものは、支拂を受ける月末までの金利をば、賣る品物の代價に増けて價を高くしてあるし、尙ほ其の上に掛賣すれば、其の義理合として他

▲福 引

- 息氣意でふくらむ【景品】空氣枕
- 次の間に控へて候お飯（お召）の時に出る【景品】膳
- 學校の幻燈
- 裏に押繪（教）がある【景品】押繪のある羽子板
- ながらへばまだ此頃やしのばれむ
- 牛（憂し）と肉見し

一家の經濟

で買はないから、掛賣をする者は一手販賣になつて物品の新鮮で無い、良くない物を賣り付けることがある。それでも耐忍して買ふことになるから、旁々以て不利益を受ける。依て掛買はせずに、成るべくは來る商人を待たずに、下女があれば下女を従れて信用のある商店へ行つて、能く品鑑別けて、現金で買求めるに如くはないのである。さうではあるけれども、出入商人でも信用のある商人ならば、それに現金で買つてもよい。

● 一時に物を多く買込み置かない事

▲福引

世ぞ今はかなしき

【景品】牛肉

●忍ぶ戀路

晴れてあはれぬ【景品】傘と下駄

●時鳥の啼き聲

●手拭掛けたか（テ

ハンカケタカ）【景品】手拭掛

●因循家

木に針がねー（氣

に張がない）【景

品】品木と針金

●危急の場合にそんな

手拭（手ぬるい）

●【景品】手拭

●貧民救助

●下の句（苦）をとる

●【景品】百人一首の

骨牌

●船の客

●突着けば上る【景

品】ゴム毬

▲福引

一家の經濟

一家の經濟

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

一家の經濟

入用の品だとして、價が安くても一時に多くの物を買入れるのは宜しくない。これは大きに徳用のやうに思はれるけれども、食品なれば腐敗する憂あり、貯藏するとても貯藏する面倒があるし、其の上多くあれば無益に多く費やして、不儉約に歸ることもあらう、面倒なやうだけれども、物を買ふのは必要に迫つて買求めるが可いこれは儉約の秘訣虎の巻である、さればとて一時に多く買つて置いて損にならない物と、買置をして置かなければ差支を生ずるものとは、買つて置かなければならない。例へば非常の

▲福引

一家の經濟

一家の經濟

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

●物を廢らさない事

▲福引

●拙者の腕前うでまえへ

お目にかける【景

品】眼鏡

●赤穂義十中の大酒

家

赤垣源藏【景品】赤

き柿と玄翁

●ちよいと小當りに

當つて見

木(氣)を挽(引く)

【景品】鋸

●東京の水道すゐだう

一家の經濟

往時諺まつかたことばに、一升の利よりは三合の見纏めが勝ると
言つた。凡そ物を廢させるほど不經濟なことは無い
用ゐられる物を用ゐられないやうにしてしまつて、
廢らせてしまふのは、食物を腐敗させ、間に合ふ物
を捨て、しまふことである。それで、日々に調理し
て食させるものは、大抵食量を計つて、食餘つて腐
敗させないくらゐにしなければならぬ。寒い時分
には、餘り物は腐らないけれども、春から後温氣の
頃になれば、餘ほど注意して物を腐らせない用心を
せぬと、其の物を捨てれば不經濟になるし、捨てる

市内に水引名の【

景品】玩具の竹刀

に水引

●別れてはまた逢ふ

こともかた糸の苦し

き夢を君と結ばむ

割かれて身を焦ん

【景品】蒲焼

●祖父の功に依り華

族に列し

柄杓(子爵)を授く

【景品】柄杓

▲福引

のは勿体ないと言つて食れば健康を害して病氣を發
し、物を捨て、廢らせたよりも大きな損をすることが
生る。

腐敗するのを防ぐのは、一つの經濟になるのである
る、煮た物を腐らせないのは、火を入れると云つて
今一回火に架けて煮立たせて置くのである。夏分は
此の心得が無くばならない。又大陽の光熱に當て、
或は乾いた空氣に曝すと腐敗を防ぐ、これを風に當
てると云ふ。入梅には干物類が貯へてあると、濕つ
て黴が生える、それを捨て、置くに遂には廢つてし

一家の經濟

▲福引

●假名手本忠臣藏大

序 蕪十(兜)改め【景

品】無十個

●同じく二段目

松切り(景目)燗寸

と錐

●同じく三段目

チーく出られぬ

から、出んチー(

殿中)(景目)鼠捕

器

一家の經濟

まふ。依て入梅前には、日光に當て、又は空氣に曝すがよいのである。生魚の肉に塩を當て、置くこと井戸の中へ吊し置くことは、何れも腐敗を防ぐ仕方だから、主婦たる者は、經濟の爲めに此の防腐の心がけが無くてはいけない。

家庭節用虎之巻大尾

大正二年八月廿五日印刷
大正二年九月一日發行

不許複製

編輯兼發行者 榎本松之助

大阪市南區松屋町三十九番地

印刷者印刷所 上野惣太郎

大阪市南區松屋町末吉橋筋北

發行所 榎本書房

振替口座大阪三四八二番

醫存便 醫本 醫規

醫本 醫規

醫本 醫規

大正二

274

354

終

